魔女の夜

ロリコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔女の夜

【Ｎコード】
Ｎ０２３５Ｎ

【作者名】
ロリコン

【あらすじ】
黒崎望と２３人の魔女。
ずっと以前に書いたものを編集しました。

首が切断される。
頭と身体を隔離する赤い線が首に円を描き、線の内側からスプリンクラーのように細粒な血液が霧吹きに飛び出す。赤い線はその幅を徐々に広げていく。遂には駆け上る血液の圧力に押されて、女の首は中空に跳ね上がった。頭を失った鋭利な切断面からは掘り出された噴泉の勢いに血飛沫が舞い上がる。
宙を飛んでいた黒い魔女の頭は黒く長い髪を振り散らしながら鈍い音を立てて着地をする。首は地面の上をくるくると回転して、首の断面が地に付いたとき偶然横転が止んだ。生首が土中から生えてきたような姿。生首の女。その首、黒い魔女は閉じていた目をパチリと開いた。開いた両目のまなじりからは血の涙が流れる。

「あーあ、アタシもヤキが回ったもんだ。夜の闘いに敗北しちまうなんてね。死んで当然だ」

唇に血を吐き飛ばしながら言った。魔女の首と地面の間から真っ赤な血がじわじわと染み出して、その血が周囲の闇夜と溶け込みそれを吸収し始めた。黒い魔女は首を刎ねられてなお世に及ぶ魔の力で夜の闇と同化をし、己の存在を継続させるつもりと見えた。黒崎望はそれを禁止した。

「魔女。あなたの肉体と魂はわたしの復讐心の前に破れた。これを認めなさい。いくらあがいてもお前の運命は変わらない。静寧なる心で死を受け入れるが良い。さすれば天界の裁定者に計らわせ、お前に輪廻を約束しましょう」

「へえ。あんた案外やさしいのねぇ」

魔女は血まみれの目をゆっくりと閉じた。そこには意がなく、闇の静寂を含んでいた。再び開くことはないだろうと、光景を目にしていた誰もが分かった。
「最後に会いたい男がいたんだ。元気にやっているのは夜闇の顫動で分かっていたけど、きっといい男になってるだろうね。まぁいいや。それじゃあね、ごきげんよう」

魔女は最後に、いかにもといった凄惨な笑みを口角の端に吊り上げ、それを置き土産にして果てた。
黒崎望は拾い上げた魔女の首を、血で衣服の汚れることも気に留めず抱きかかえる。頭部を失って未だ地面に足を付け仁王立ちに残っている魔女の身体、その首の上に魔女の頭をそっと乗せた。手を離し、生前と殆ど変わらなくそこに現れた魔女の姿に、拍手を2度叩く。頭を下げてお辞儀する。
魔女の亡骸は、彼女自らが支配をしていた夜の闇に呑まれて消えた。
同じ時をして、黒崎望の精神から黒い魔女を標的とした復讐の宣誓が闇に呑まれて消えた。

しかし7歳に宣誓をして黒崎望が今日まで過ごした12年間、常に彼女の中心にあり生命の駆動力となった復讐の悪意は、黒崎望の想像以上に彼女の精神を深く侵食していた。黒崎望の心を苗床に発芽し、12年のうちに巨大な樹木にまで発育した悪意は、魔女を殺害した事実によってその葉を枯れ落とし、幹を腐らせ、芯まで朽ちて倒木した。が、張り巡った根までが完全に排除されるには至らなかった。黒崎望は魔女を憎悪した修羅から完全に脱却することが出来ていなかった。
黒崎望は魔女の継承技能の全容を理解してはいなかった。しかし今夜、黒い魔女と対峙し、魔女と自分の殺意が一瞬間交わった時、

黒崎望は結末を見た気がした。黒い魔女の名は、それを否定し抹殺したものの、魔女を憎み恐れる感情自身に飛び火し、闇黒を強制的に継承させる方法で継続されてきた。

押し売り強盗の図々しさで他人に自分の姿を継がせる魔女の陰険は、誇れる勇気と健全なる生活と潔白な精神を持つものならば難なく抗うことができるだろう。が。黒崎望は勇気も、健全な生活も潔白な精神も持ち合わせていなかった。１２年の歳月に渡り彼女の内側に抱き温められていた復讐の闇。それが役割を終えてなお払拭されずに残り、黒崎望が意図しないまま、彼女の代弁者となった。魔女継承の闇黒と共鳴をして黒崎望の中に魔女の素質を孕ませ産み落とさせた。黒埼望はそれに抗えなかった。先刻の魔女との戦闘が、彼女の命と精神を極限まで消耗させ、魔女継承に抵抗させるだけの力を許さなかった。黒崎望は魔女を受け入れるしかなかった。

黒崎望は絶望や落胆ではなく、これは初めから決まっていたことなんじゃないかな、運命なんじゃないかな。そう容受した。魔女がお父さんを殺して、それを知り、幼いながらに自分の終世を復讐心に焦がされて死んでゆく憎悪のカードと定めたあの夜に、もう、わたしは魔女になっていたんじゃないかな。

黒崎望には２人の協力者がいた。協力者であり親友の２人。前田みどりと深田裕は、先程まで続いていた黒崎望と魔女との戦闘において、黒崎望をサポートしていた。

黒崎望は体中にべたりと塗りたくられた闇を振り払うようにして、後ろの２人に向き返った。そのとき揺られた長い黒髪は、いつものように綿毛を思わせるふわりとした流れではなく、洗いざらした直後のような重たさをはらんでいた。その奥にある望の表情は青白く、人形のように温かさを持っていない。はめ込んだガラス玉程度の光しか反射しない望の瞳に、２人は思わずゾッとして息をのんだ。

「ノンちゃん……」

「心のどこかで……あいつを、魔女を殺せば全てがリセットされると思ってた。普通の、その辺にありふれてるような人生を送れるようになるって思ってた。でも……違う。今はただ胸が、苦しい。復讐を終えたらもっと、心に新鮮な風が吹き込んで爽やかに感じて、人生の次のステップに進むための、復讐心に変わる希望の力が身体の奥底から湧き出てくるものだと思って……。それって違ったんだね。全然違う。憎しみと長く交わり過ぎちゃったのかな。あいつを殺した今も感じる……自分の心が、払拭できないほどの闇黒に汚れていること。その闇黒が、あの魔女だけを憎しみの対象にしていたわたしの誓いが、あいつだけにぶつけるつもりで自分で芽生えさせたこの殺意が、あの魔女を失って行き場を失ってる。いつの間にか巨大になって、魔女の命だけじゃ飽き足りなくて、暴走をし始めてる。わたしはそれを収束できない。わたしの意思とは無関係に、何の関係もない人たちを駆逐しようと手を伸ばし始めている。それを痛く感じるの。心がひどく後ろめたくて息苦しくて、申しわけがないと思う。でもその後悔の念は、これ以上にないほど優しくわたしを抱きしめて、安心でわたしに満たそうとするの。これまであいつを憎しむことで自分を築き上げてきたわたしが、支柱を失って倒壊しないように、新しく憎悪の対象を探している。わたしが自我を失わないように守ってくれてる。わたしの心の闇黒は、宿主のわたしを救おうと努力している。はっきりと分かる。それは病気で寝込んだ家人を看病しようって思う子供みたいな純粋な気持ちだよ。悪意はないけれど、でも結果的に悪を生み出すけど。ああ。でも、これから黒い魔女に成るわたしにとって、この闇黒は都合がいいのかも。だって無理して関係のない人を恨んだり憎んだりする必要なくて、呼吸をするみたいに自然とそうなってくれるんだもん。ね？　えへ」

「望ッ、ふざけたこと言ってんじゃねぇよ！　お前、夜の魔女を殺したら、次の魔女には自分がならなくちゃいけないことを知ってた

のか？　初めから全部知ってたんだな！？　それなのにどうしてッ、なんで自分の一番憎むものに自分自身が変わっちまう方法を」

「ミーちゃんと深田君には、どれだけ感謝しても足りない。今まで私の我がままに付き合ってくれて、本当にありがとう」

「なっ、なんで最後のお別れみたいなこと言うん？　あたしこれからもノンちゃんと一緒に居るつもりやよ。ノンちゃんが魔女になったって、それはあたしとノンちゃんの間に何の障害も生まんよ。なんも変わらんよ、あたしたち。ノンちゃんが魔女の黒い気持ちに負けへんように、一緒に戦うよ。初めから諦めとってどうすんねや。ノンちゃんらしくないよ、1人で抱えんといてよ、あたしにも手伝わしてよ！　これまでとおんなじやんか、みんなで乗り越えていったらええやないの！」

「望、お前。クソッ、望！　縁起でもねーこと言うなよ！　1人でどこかに行こうとしないでくれよ、どこにも行かないでくれよ。今までと同じように俺達の側にいてくれよ、魔女になんてならないでくれ。魔女を殺せたんだから、魔女になる運命だって覆せる力がお前にはあるんだろ？　お前だけの力じゃ足りないなら、俺とみどりが手伝ってやるよ！　だからお願いだ、ここに居てくれよ、どこにも行かないでくれ」

＜＜デリンジャー［黒崎望］の魂が形を変える。
＜＜黒崎望は黒魔女を継承し、魔女［黒崎望］となった。

自分という存在を他人の記憶から抹消するのは案外に簡単なことだ。魔女ならば尚のことである。他人の記憶に存在する自分の姿や

言葉や行動を、自分以外の誰かのものと挿げ替えてしまえばよいのだ。人間の記憶は曖昧で、殆どが思い込みの領域を脱しない。魔女が人々の記憶を操作するときも、その思い込みを利用する。
ただ魔女といえども、改竄出来ぬほどに強烈な記憶というものがある。その人が何よりも慈しむ記憶。或いは何よりも憎しむ記憶。それらは魔女や姫のような強い力を持つ者でも操作を行うのが難しい。
そのときは操作をせずに、記憶を破壊、抹消してしまうのだ。そして既存の情報から代替の効くものを選別しそれを加工して、破壊され失った記憶の穴を嘘の記憶で埋めてしまえばよいのだ。

＜＜魔女［黒崎望］の影から時間と精神の管理者クロノが召還された。（処理　甲類　逆）
＜＜クロノは前田みどりが持つ黒崎望に関する記憶の全てを対象に、記憶の破砕及び改竄の処理を行った。処理は１００％の精密さで行われた。これ以降に前田みどりは以前の黒崎望に関する全ての記憶を失い、それを呼び戻すことは二度とできない。（革命　甲類　逆）
＜＜クロノは深田裕が持つ黒崎望に関する記憶の全てを対象に、記憶の破砕及び改竄の処理を行った。処理は１００％の精密さで行われた。これ以降に深田裕は以前の黒崎望に関する全ての記憶を失い、それを呼び戻すことは二度とできない。（革命　甲類　逆）

長い黒髪が夜風に揺れる。
揺れる木々、擦れ合う葉々が、甦った恐怖に悲鳴を上げる。
猫は急いで逃げ、町中で戸惑う。
犬は威嚇に遠吠える。
救急車の赤いサイレンが闇夜を突き刺す。
新しい魔女が誕生をした。
魔女の名前は黒崎望という。

「さようなら。ありがとう」
魔女に関わると碌なことが無い、と、かつて1人の姫が口にした。
そしてそれはきっと本当だ。
黒崎望はそれを信じていた。
だから、2人から自分の記憶を奪った。
新しい魔女となった黒崎望という女の記憶を、2人から抹消した。
だけどそれは何よりも悲しかった。
取り壊された大型デパートの更地に立ち尽くし、黒崎望は瞳から溢れる悲しみに抗い、上を向いた。
彼女の傍らに立っていた2人の人影はもういない。
夜風を身に浴びている。
1人で。
「1人だ」
1人は怖い。
黒崎望はあの夜に父親を失って以来、1人になることを何より恐れた。
現実的なものではなく、精神的な面で。
いつも誰かに支えられていたい、また、その逆でありたい。
常に願っていた。
前田みどりと深田裕はそれを叶えてくれた。
黒崎望の側にいつもいてくれた。
2人のことを誰よりも好きだった。
何より大切だった。
その2人を黒崎望は自ら突き放した。
「魔女と関わった人は不幸になる、から」
魔女と関わったものの末路はいつも哀れだ。
それは事実だ。
魔女の強すぎる魔力が、周囲のものの精神や運命を病ませてしま

う。
故に古来から魔女は町外れの辺鄙な場所にたった独りで暮らすことが多い。
だかしかし、黒崎望の決断にはそのような意図が本当にあったのか？
本当に？
本当は違うのではないか？
黒崎望は、魔女となった自分が2人に苦痛と悲痛を与えることのないように、自ら2人を遠ざけたのか？
本当は違うのではないのか？
本意をごまかす為の隠れ蓑ではないのか？
「え？」
魔女の粗悪な運命に巻き込まないように、泣く泣く2人を突き放した？
2人の幸せを祈りながら？
2人が何も知らずに平穏な生活を続けていけるように？
「そう、だよ？」
本当に？
本当にそう思ってんの？
それ、違うでしょ。
「どこが違うっていうの？」
おいおいおいおい。
やめてよね。
とぼけるんじゃねえよ。
それとも本気で言ってるのかな？
「本気って……わたしは嘘なんてついてないもん」
嘘はついてないって？
「そうよ。嘘なんて言ってない」
分かってないね。
嘘を言ってないっていう、それがもう嘘なんだよ。

のぞみちゃんは嘘つきだね。
「は？　だから何言ってるのか全然分かんないんだけど。わたしのどこが嘘つきなの？」
ふっふふふふふっふふ。
「何がおかしいのよ」
いやーごめんごめん。
ふふふはは。のぞみちゃんは嘘つきの上に、自分が嘘をついているっていう自覚をまるで持っていないんだ。
根っからの魔女気質じゃん。
「はっ？」
のぞみちゃんは、魔女の命を絶った代償として魔女の名を継いだんじゃなくって、本来そうあるべきだったんじゃないの？
「バカじゃないの？　そんなことあるわけ」
のぞみちゃんはきっと生まれながら魔女として生きていくことを決定付けられた娘なんだよ。
ははははは。
「違う。ありえない」
いや違わない。わたしの思う通りの人間だよ、あんたは。
うっはー面白ッ、天使が魔女の子を産んじゃったんだ。
ははははは。
「黙れ」
おっと。
怖い怖い。
魔女の名と交わって1時間も経たないうちに力を開放するつもりなわけ？
「お前は誰だ」
わたしの正体が知りたい？
おやおや、そんなふうに闇雲に知覚神経を周囲へ張り巡らせても無駄だよ。
そっちじゃないよ。

「……こころ？」
外れ。
あんたの心にいるわけではない。
でも、そこもわたしの一部ではあるけれど。
「お前は誰？　歴代魔女がわたしの心に塗り付けた闇黒？」
そんなことどうでもいいじゃない。
それよりも望ちゃんって本当に酷いよね。
ミーちゃんと深田君を自分の良いように操っちゃうんだもんね。
あの２人をオモチャみたいに扱っちゃうんだもんね。
でも他人を自分の好きなようにいじくるのは得意だもんね、魔女はさ。
「だからそれは違う。わたしは、２人のためを思って」
ブブー。
まだ嘘付くつもりなんだ、まったくしょうがない子だねー。
自分で認めることが出来ないんだー望ちゃんは。
ふふ、しょうがないなー。
じゃあわたしが教えてあげちゃおうかなー。
わたしちゃんと知ってるんだよねー。

望ちゃんは自分を守るために、２人を自分から突き放したんでしょー？　最初からそのつもりだったんでしょー？　２人のことなんてこれっぽっちも考えていなかったんでしょー？　実はあの２人の記憶から自分を消したんじゃないんだよねー？　実は実は実は、その逆でしょー、自分の記憶から２人を消したんだよねー？　だって、もう傷つくのは嫌だもんねー？　お父さんが突然いなくなった時と同じ気持ちを味わうのはゴメンだもんねー？　あの２人がー、魔女になった望ちゃんの姿勢と感情に絶えられずに望ちゃんと縁を切るのなんて時間の問題だったしー？　記憶を消そうが残そうがどっちにしろ２人が自分から離れていくのは、絶対に阻止できない必然のことだったからねー？　それだったらさー、あの２人に愛想尽かれ

て捨てられるくらいならさー、お父さんを殺されたときと同じ孤独をも一度味わわなきゃいけないくらいならさー、捨てられる前に自分から2人を捨てたほうがいいよねー。そんなの当たり前だよねー、捨てられるよりも何倍も楽だもんねー？　わたし1人で生きていけます宣言しちゃったほうが、開き直れるもんねー？　苦痛なんて感じもしないもんねー？　望ちゃんはミーちゃんと深田君がこれまでと同じような接し方はしてくれないだろなーって考えたんだよねー？　だって望ちゃん、悪い魔女になっちゃったんだもんねー？　魔女になったことで2人の友情が自分から簡単に離れていっちゃうと思ったんだよねー？　9年間も一緒にいたはずの友達を信じられなくて、自分の記憶からさっさと消しちゃうなんて、うふふふっふふふふいいんじゃないいいんじゃない望ちゃん。あらららららら何、なんですか、やだ泣いちゃったりしてんの望ちゃんってばもー、悲観する必要なんて全然ちっともないじゃーん？　だってだってあーってー望ちゃんの自己防衛に打算的なところってとっても魔女ぽくてすごぉくステキじゃなーい？　それに他人を心から信頼できない根っからの疑心暗鬼気質とか、今まで唯一無二の大切な親友だった奴等の記憶を一瞬で闇に葬っちゃえる冷徹さとかも、そんじょそこらの魔女じゃあとてもとても足元に及ばないって感じでちょーくーる。わたし思うんだけど望ちゃんってすっごくすっごく悪い魔女になれると思うなー。ってかこれって誉めてるんだからねー？　分かってるよねー、望ちゃんはアホでクソで救いようのないバカどもを地面に平伏させてそいつらの顔面を踏んづけて踏んづけて腹を蹴って蹴って蹴って蹴って血を吐くまで蹴り上げてそれから殴って殴って殴って殴って目も鼻も口もグチャグチャになるまで殴ってやったあとの皮が崩れて骨が突き出した醜い顔面を指差して笑って笑って大爆笑しておなかがねじれて痛くなるくらい笑い転げてやる場面を世界中の人に見せてあげるのが仕事なんだからねー？　間違っても自分が好かれようとかそんなこと考えちゃダメなんだよー？　あっあー、でもでもでもでも望ちゃんは根性が根っから捻じ曲がっ

てっから、無理に嫌われようなんて考えなくていいザマスよー。望ちゃんの普段どーりの寝て起きてメシ食ってウンコして歩いて走って声を出して頭を掻いて笑って怒って昼寝するってゆーナチュラルな生活の振る舞いが全部、周りの人たちを余すことなくムカつかせるだろーからねー。お前は、魔女だからねー。ひっひひひひ無駄ですよ無駄無駄、無駄なんだってば。魔女の運命から逃れられることは誰にも出来ないよ。唯一お前の命が失われる瞬間を除いてね。

「わたしは、」

「わたしは魔女だけれどそれを誇らない。約束します。黒い魔女であっても闇に触れません。お日様を尊び敬います。誠心誠意で万人に接し礼儀を重んじます。誓います。誰とも剣の先を交えません。誰にも憎しみや苦しみを植え付けません。守ります。人を好きになります。素敵な人と愛を育みます」

黒崎望の生活は変わらなかった。

朝7時に起きて目覚ましテレビを見る。

朝食はトーストを食べる。

自転車で駅まで行って、満員電車に乗り、たまに痴漢に遭う。

倦怠で退屈な講義をこなして家路について、菓子類で小腹を満たしてから、スーパーのレジ打ちのアルバイトに出かける。

真面目に働く。

仕事を終えて、コンビニに寄って、帰り道沿いの民家に飼われている愛想の良い犬の頭を撫でる。

豆電球の点いたオレンジ色の1Kアパートに帰り、テレビを付けたままベッドに寝転がって、雑誌を読んでいるうちにウトウトして、夜中の4時ごろにふと目を覚ます。

テレビと電気を消してちゃんと布団に潜って眠りにつく。延々とリピートする。

ただ、前田みどりと深田裕の姿はそこにない。
静寂に満ちている。孤独が耳に痛い。

「クロっちー、なに1人でブルーはいっちゃってんのー？」

「あー、えーべつにそんなことないよー」

学食でノロノロと昼御飯を口に運んでいた黒崎望に、肩越しから声を掛けてきたのは瀧本瞳だった。
雑誌のモデルを忠実に再現したようなファッションセンスの比較的いけてる友人だった。今日はレザージャケットとリーバイスで決めている。望はそれよりも、瀧本が履いているスニーカー調のハイヒールが珍しくて気になった。そのヒールをカツカツ言わせながら、瀧本は望の向かいに座った。

「そーいえば最近クロっち1人でご飯食べてること多くね？」

「えー。そうかなー」

「うん。あれー？　でも、元々だったっけ？　ま、いっか」

と、会話をしながら瀧本は、時々に望が自分の肩越し後ろをちらちら盗み見ていることに気が付き、後ろを振り返った。
後ろの席には言い争いをしている男女、もしかしたら恋人同士かもしれないが、周囲に喧騒を振り撒いて学食の注目を一身に集めている。

「何が違うことがあるか、このボケェ！　白状せんかッ！」

「だっから、違うの！　お前が誤解してる時点で違うんだよ！　あ

れは俺の、い、従姉妹だよ従姉妹！」

「テメー今口ごもたろが、聞いたぞワレコラ」

「いや、だから。あれは従姉妹です」

「まだ言うつもりやな、分かった。せやったらこっちにも考えがある。死ね！」

「ギャッ。お、ち、つ、け、みどり！　ここは食堂だ、公共の場！」

「じゃかしわ！　あっ貴様！　待たんか、ブッ殺す！」

全力で学食を飛び出していった男の後を、凶悪な身軽さの女が追いかけていった。それを目で追いかけていた望の様子を、瀧本は見ていた。

「ほっほっほっほ」

「えっ」

薄気味の悪い笑い声を連呼させる目の前の瀧川。望はビビッて箸をこぼしそうになった。

「そーかクロっち。あの仲良し夫婦が羨ましいわけねー。クロっちも男が欲しいってわけだ！」

「えっ」

「なによー早く言ってくれればいいのにさー。水くさーい。ちょう

ど今夜合コンがあるんだけど、メンバーが足りてなかったんだー、クロっち来るよね？　バイトとか休んじゃいなよ。今日の合コンってケッコーイケてる連中が来るんだよね」

「えっ」

「な。じゃあ7時に駅前に集合ってことでね」

「あ。えっ」

というわけで合コンに参加することになったんですけれども、駅前に集まった女性メンバーの中でも黒崎望がブッチギリで田舎くさそうなドンくせぇ女子だった。普段は女子間の容姿をあれこれ言う会話にあまり興味を持たなかった望だったが、この現実を前にしてさすがにガックリきた。

いやー、瞳ちゃんの友達だけあって、わたしなんてとても足元にも及ばないくらいっていうか自分と比較しようなんて考えただけでこっぱずかしい気持ちになってしまうくらいに、みんなカワイイです。

なかでも同性のわたしから見てもグッと来るのはもちろん瞳ちゃんで、あのあと家に帰って着替えて来たのね、学食で見た格好と違うね。この5人の中じゃなくても、この町中でも群を抜いてカワイイなぁ。っていうかわたしもａｎａｎとかｃａｎｃａｍとか読んでるつもりなんですけど、なんでこんな差が出るかなぁー。んーそうかセンスか。センスが違うんですかね。生まれついての能力差か、これは縮めようがないかな。あー、ガックシ。来なきゃよかったかな。は、は、は。アラなんでしょうか、自然と口を突いて出てきた

自嘲気味の笑いが止まりませんよ。あはははは。は。
という落ち込み具合のまま居酒屋へ行きました。はい。
合コンをスムーズに円滑に進行するための必須テクニックその1が、入店後に早くも瞳ちゃんの指先からほとばしりましたよ。
入店後、わたし達はすぐ男の人たちが待っているテーブルに行っちゃいけないんだって。速攻でテーブルに向かうような女は、男なら誰だっていいと思っているとっても卑しい男好きなんだ。それ以外の女の子たちはテーブルに足を向けるその前に、待っている男の子を離れた所からじっくりと観察するらしいです。どんな男の人が参加してるのか把握するんですって。顔とかファッションとか持ち物とか……。んで男の子達の評価をみんなで充分に吟味した上で、足をテーブルに向けるか、それともカラオケに進路を変えるか、どちらにするか決めるらしいですよ。わたしは合コン来るの今日で2,3回目なので知りませんでした。
今日はみんなのGOサインが出たのでテーブルに行ったよ。
テーブルの5人の男の人はわたし達、っていうか正確に言うときっとわたしはそこから除外されていただろうけれど……わたし達が到着するとIYHOOO！とか、へんてこな声を上げて諸手を挙げて歓迎してくれました。いやー、なんて言うんでしょうかみんなホストみたいにカッコよかったけど、1人だけわたしみたいな、って言ったらきっと怒られるだろけど……他の人とはちょっと違って、頭も黒髪のままの人が居たから、おやッ？　と思ってよく見たら、
「うはッ？！」
「え、望ちゃんなに？　知り合いでもいた」
「あーううん。違ったー、似てる人」
ってゴマかしたけど、なんだこりゃ。なんでしょう。

黒髪の男の人を見た瞬間、わたしの中の魔女が危うく表面に飛び出してきそうになった。わたしはそれを、穴の開いた潜水艦の浸水に板を押し当てて必死で止水している潜水夫の最中です。こういうときは深呼吸をするといいんです。

すーはーすーはー。

よし。落ち着いた心と瞳で男を見る。そして判る。

あの黒髪の男は、魔女の祝福を受けてる。理屈なしで、五感で読み取った。まだ魔女に成り立てだし、魔女の祝福とかの意味も全然分からないけど心の中に自然とその言葉が浮かんできた。この男は過去に一度魔女と関わりを持っている！　それがどんなものなのかまでは読み取れないけど、確かだ。その魔女はもしかしたらわたしがずっと憎んできた魔女とのものかもしれない。向かいに座っている男は、なんとなく、わたしが殺したあの魔女と同じにおいがする。

っていうか色々とノロノロと思考していた内にわたしの座席がその男の向かいに勝手に決められてしまったわけです。だけどまぁ、2人とも壁際の端っこでいかにも頭数合わせって雰囲気だし、おなじ魔女のにおいを持つもの同士だし、めでたい合コンの席ですし、ここはひとつ、ケンカなんかしないで仲良しモードでやっていきましょうねッ？

うふふっ、あははっ♪

とか思ったけど、目が合ったとき、向かいの男の人はすごく不機嫌そうな顔をしてた。そんなに頭数合わせの捨て駒みたいなポジションが気に入らないのかな……。それとも正面がわたしみたいなザコ女だから滅入ってんのかしら。失礼な。いや、そのどちらでもないのか？　もしかして向こうもわたしが魔女だってことを見抜いているのかも？　……知らないし、分かんない。

でもいーや別に、もしそうだとしても、逃げるわけにもいかないし、こんなところで騒ぎになるようなことを起こすつもりも、ないはずでしょう。わたしはありません。彼の雰囲気に殺意や敵対心も感じられない。ただ機嫌がちょっと悪いだけみたい。これはひとま

ず安心のサインと考えていい？　目付きは悪いけれど、とりあえず友好と取っていいのかな？　ってことで、乾杯のドリンクを注文します。あ、わたしも同じで、ナマチューで……はい。

えーっと自己紹介です。男の人たちからです。向こうからコージさん、ユウさん、ジュンさん、スーさん、ときて、最後に黒髪の人。それまでのマリファナハイな男の人たちの自己紹介と一線を画して、

「あー、星野です」

と、ただそれだけ。その場の笑いを取ろうともしません。

とっても事務的で調子が低くて耳触りで感じが悪くてやる気のなーい、場の雰囲気を全然考えなーい、冷めたラーメンのような自己紹介にテーブル中が静まり返りました。けど、そこですかさず合コン百戦錬磨の瞳ちゃんの出番です。

「ハイッ！　じゃあ次はクロっちお願いしまーす！」

と突然振られた。心の準備も何も出来てなかったから、

「えっ！　あ、はっ、黒崎のッのぞみですっ」

と、どもりながらゆったらなんでしょう。星野さんが繰り出した南極サイズの極寒の中でオーロラを見上げていたような態度だったのをコロッと翻した全員が「どもっちゃって、カワイー！」とかって大爆笑した。どこが可愛かったんでしょうか。それより大爆笑されてるこっちは全然面白くない。恥ずかしくなって顔が熱くなってきた。きっと赤面してると思ったので前髪で積極的に顔を隠しました。でも場の雰囲気を再び盛り上げられた。ダッサイ田舎娘の分際で合コンのスムーズな進行に貢献できたのでまぁ、結果オーライっ

てやつです。これで出番終了という感も否めませんけど。うん。

そしてその予想は本命的中、払い戻しです。

合コン開始３０分くらいで早くも席替え。わたしと星野さんの幽霊合コンメンバーは2人仲良くテーブルの隅っこに追いやられて片寄せあって、寂しさで凍死寸前ブルブルと震えています。

ってのは嘘でー、わたしだけは今言ったみたいに1人寂しくしてたんだけど、星野さんは席替えの直後にトイレかなにかで席を立ったまま一向に帰ってこないよ。だからわたしは1人で呑んでます。たまに隣のナミちゃんとユウさん組が楽しげーに交えているトークに耳を傾けて、あははーとか笑い声を合わせています。死にたいほど虚しい。その向こうでは3対3の男女がいい感じの組み合わせでかなりの声量ではしゃいでいます。

まぁわたしも魔女ですから。……いえ、例え魔女じゃなくてもこうなること……つまりダサいわたしだけ1人孤島に取り残される事態に発展するんだろうなァとは予測してたつもりですが、いざその通りのシチュエーションに身を置くことになると思いのほか手持ちぶさたで腹立たしくもあり、なによりクソつまんないです。とてつもない疎外感です。わたしはイジメとかに遭った事はないんですが、高校のときクラス中のみんなから無視されていた人……　もちろんわたしもイジメの標的になりたくなかったので同じように無視していましたが、成田京子さんという人が居たんですけど、その子の気持ちってこういう感じだったのかなーと思いました。

取り留めのない思考の端でビールがよく進みます。ヘイヘイ、わたしもう3杯目空けちゃいましたよー。誰か店員さん呼び止めて追加のビールをお願いしまーす。

それで、４杯目来ました。相変わらずうめー。ゲフッ。ナミちゃんが瞳ちゃんか誰かに声掛けられてですねー、ユウさんとの会話が一時中断した時なんだけど、手持ちぶさたになったユウさんが仕方なくって感じで、っていうか本当にそんな気分だったんだろうけど、

わたしに話し掛けてきたわ。

「ウオッ、スゲー進んでるじゃん！　あんま飲まなそーな顔してケッコーいくんだね」

「あーそうですねー」

「酒強いんだー」

「えーでもすぐ顔とか赤くなるしー」

「ってか全然赤くねーよ」

「あれーホントですか？」

「おいおい、酔わせてホテル連れてこうと思ったのになー、無理じゃん！」

「エー、ユーサンそんなこと考えてたんですかー？　やだー」

とか。自分の低脳さ加減にうんざりとしながら、それでも酔ってグデングデンに近づいているわたしの脳味噌は精神で制御できる範疇からどんどんと遠ざかり旅立っていってしまうであります。それに今まで一人寂しく飲んでいたので、舌がツルツル良く動きますよ。人っていう生き物は寂しいともうなんでもいい、誰でもいいからお話をしたり触れ合ったりしたがるという、お話を、誰かが言っていたのを思い出しましたよ。

ホッホー。とても酔っ払っています、わたし。

「アーそーいえば星野さんいなくなっちゃったデスねー」

「ああ星野ね。あいつはいいんだよ。あいつ合コンとか初めから興味ない奴だし」

「えーそーなんだ」

「それに彼女もいるみたいだし、だいたいあいつ居ると場が盛り上がんねーの。自己紹介とか聞いたでしょ？」

「あー最低でしたね」

「でしょ？　でしょ？　あいついっつもあーいう感じなんだよね合コンの時に限ってさ。普段はフツーの奴なんだけどね」

「彼女居るのに合コン来るんですねー」

「ああ今日は俺が無理言って来てもらったの。どうしても1人足りなくて無理に、だってそうしないと合コンできないじゃん？　途中で飽きたら帰っていいって言っといたから、もう帰ったんだろ」

「へー。へー。わたし、トイレ！」

「おお。おう。なんか注文しとっか？」

「あーいいでーす。帰ってきてからでー」

トイレの鏡に映っていた自分の酷い顔を見てしばし正気に戻る。

ああ酔ってんなーコレ。まずいなー。ピッチが早かったなー。今戻ったらきっとまた飲んじまうなー。

一度店の外に飛び出して頭でも冷やすか。

ガラガラ音の出る引き戸を開けて外に出ると、夜風のひんやり感がとても懐かしいです。火照った顔と首に心地がいいです。
外にはなんでしょうか人待ちでしょうか、わたしよりもずっとダサい男の集団がタムロってアニメみたいな話をしてました。まぁいい。
そいつらの脇をすり抜けて、店の入口から少し離れたガードレールの前に辿り着く。と、そこに座っている男は。
あらららら、星野さんじゃないですか。
帰ったと思ったら帰ってなくて、ガードレールに座って携帯をいじってます。
ホホホホ、なんでしょうなんでしょか、彼女にお迎えでも頼んでいるんでしょうか。
わたしは酔っているので、きっと酔っていなかったらそんなことしないでしょうけど、酔っているので星野さんに声を掛けます。
「あのーあのー何しているんですかー？　中に戻らないんですかー？」
って聞いたの。そしたら最初に会った時のひどくキツイ目付きよりもっともっと、気の弱いコならショック死してしまうくらいのメデューサの目で睨んできたよー。こっ怖ぃよー星野さーん。
「誰だテメー」
ウハッ。覚えてないのかよ！　みんなを爆笑の渦に巻き込んだわたしの自己紹介聞いてなかったのかよー。
ア、ウ、ト、オ、ブ、ガ、ン、チュ、ウ、ッてヤツですか。
「えー、と……あの、黒崎です。黒崎望」

「はっ？　知らねぇー」

なっなんですか！　なんだチミは？！　わざわざ名前を教えてあげたわたしをシカトしてメールしてますッ！　なんて慇懃な、態度のデカイ最低な男なんでしょうか！

星野、この際呼び捨てで構わないと思います。星野はわたしに一目も向けず、携帯をしまったポケットから続けて煙草を取り出した。

ほーＨＯＰＥ？　知らない銘柄ですねー。それになんだか短いですねー。あら、美味そうに吸い込みますねー。わたしは喫煙家ではないんですけど酔った勢いでなんだか一緒に吸いたくなってきちゃったよー。

「さっきからなに見てんだてめぇ」

「タバコ1本ほしーなーと思ってー。くださ、い？」

と言ったら渋る素振りもせずにくれました。

なんだ意外と素直さんですよ。

それに火まで点けてくれるんですのよー優しー。

でもわたし吸いかた知らないから、指で挟んだ煙草の先端に火が点くの待ってたら、いきなり叩かれた！　バチンって！　すごく強く叩かれたの！　会って1時間も経ってない、言わば初対面の相手をですよ、しかも会話も碌にしてない人を、しかも自分で言うのいやらしいけど、わたし女なのに、叩かれたよー！　ひでーよ、酷すぎッ！

「なっなんで叩くんですかー！」

「ふざけんなバカ！　煙草は咥えて吸い込まなくちゃいつまで経っても火ぃ点くわけねーだろッ！　バカ！　知らねーで初心者が調子

こいてんじゃねーよ！　バカッ！」

「なっなんですかー！　そんな、バカバカ言わなくたって、いいじゃないですか！」

「うるせーな！　さっさと点けろよモタモタしやがって！　ムカつくんだよ！」

　なななななんてフテブテしーんでしょこの男は！　さっきの優しさもきっと偽りだっ！

　うー！　あー！　がー！

　ここでなんか言い返したいんだけど、きっと言い返したらまた星野が言い返してくるから、そしてわたしがそれに言い返したら星野がまた言い返して、っていう無限ループにはまってしまいそうなので、痛い痛い頭を擦りながら諦めて黙って煙草を咥えました。んで吸い込んで火をつけました。

　一瞬で口の中が苦くなって、喉の中を針がグザグザ突き刺さった痛み。

　ゲホー！

　なによこれ、人間が吸うもんじゃないよー！　煙た過ぎるよー。

　気持ち悪くて我慢できなくて吐き出しちゃったよ。あー星野の前で、平然と吸い込んでみせてヤツの顔に煙を吹きかけてやる予定がーくずれてーくやじー。

「ゲホッゴホゴホッ」

「あーあ。バッカじゃねーの」

「でょっど、いぢいぢバガバガいばないでよ」

「はっ。なに言ってんのか分かんねぇよ。じゃ俺帰るから、誰かに言っといて」

「ばっ？」

「ーーくろさき望ーのーやろおおーぉー気があーつきゃがったなーあー明確にーぃー知覚をしーているわけではないようだが星野哲郎の精神規格の祖形は黒影組織が成形している真実を魔女の深紅の眼の解析でなくただ人間としての俗的な六感の曖昧を延長させた確信で捕らえそれを結論しようとしている」

「とてもまずいです」

「ホシノをジブンのドウルイだとシンじてアンシンするつもりだよあのムスメは」

「つまり、どういうことなの？」

「つまりくろさきのぞみさんはじぶんとおなじやみにおいのするほしのてつろうさんとならばふつうのともだちかあるいはこいびととしてのかんけいをたもちながらふだんどおりのせいかつをおくってゆけるだろうとしんじはじめています」

「事実、星野哲郎が黒崎望の闇黒に侵蝕された記録は全くございません」

「同属同士ならば侵されないと、そういうことですか」

「ううむどうしたものかねぇ」

「どどどどうしよう」

「黒崎望の急設された魔力の薄弱では闇黒の素質を生まれながらに持つ星野哲郎を現実的精神的空想的に殺害することができませんよ」

「うふふふっ」

「誰に対しても嫌悪と病害を与える黒い魔女の大前提を破るつもりか、あたしら歴代に汚泥を擦り付けるようなもんだよ、許せん！小娘ふぜいが」

「いいだろ、ババアどもが僻んで愚痴ってんじゃねーよ！　耳触りだから黙ってろ」
「あああああのですねあなた方老人の時代は終わっているのですよ、魔女はみんな悪性・年寄り・醜女・腐敗臭・嘘つき・陰険・救いようのない邪悪・結局最後に負けて死ぬ、て落ちは終焉しているのです、今は全然そんなことありませんのよ、無限の多様性に裏打ちされた時代です、いつまでも形式に縛られていると、黒崎望の若さと美貌が生み出す心の中の希望の太陽に照り焦がされて朽ちて、石になって風化して砂になり夕焼けの見える丘から海に向かって撒き散らされ意思さえ残らず果てることなりますよ、いいですか先代魔女のババアども、心に寛容を持つべき時代がやってきているのです」
「だ・い・た・い・ま・じょなんて世界の何の役にも立ちゃしないんだから、干渉せずにあの子の好きなようにやらせてやったらいいじゃん」
「そんなものが認められるものか、貴様らには分かるまい、誰にも愛されず望まれず、誰かを愛することも望むことも出来なかった私の病んだ精神が闇に腐り、唯一自分を救う方法としての黒い魔女の道を選択し、生物としての価値の底辺まで陥落するしかなかった、わたしの絶望が」
「そんなこと知らねぇよ、クズが！」
「許さない、黒い魔女に成った女が一瞬でも幸福を感じることをわたしは認めない」
「うううぜぇぇぇんだよばいたぁぁぁあ！」
「死んでしまえ」
「みんな意外と心が狭いんだねぇ、あたしなんかは黒崎望に殺されたわけなんだけど、まぁ別になんとも思わないしねぇ、ただ星野哲郎とは仲良くしたいと思うね、あの男は類稀な心の暗闇を隠し持っているからね、今から抱き込んでおけばきっと心強い味方に、なるさ」

「えー、なんなのコレ？　どうしたらいいワケ？」
「ハハハハハハ、バァァァァァァァァッカ！」

ああ、背を向けて。
ポケットに手を突っ込んで、明確な意思のない適当さでゆったりと街路の暗がりに消えてゆく星野が、なんだかカッコよーく見えてしまって、いとおしく目に映ってしまって、いよいよビールのアルコールが脳を侵攻し始めたようです。
わたしは思わずに彼を追いかけることを決意してしまった。
ただ、その直後に。合コンの席へ鞄を忘れてきたことを思い出してしまった。人から見れば安物かもしれないけどわたしから見ればとても高かったんです。ルイヴィトンです。
それが、魔女の力を使おうと思った動機。
なんていうのかな。だってさっきだってテーブルにわたしの居場所なかったんだもん。空気みたいでさ。トイレに行くって言って席を立った半分は、その場からの逃避。あからさまな疎外からの脱出。瞳ちゃんはわたしに彼氏斡旋とかそういう人助け根性じゃなくてさ、きっと、わたしを踏み台にしているんだ。田舎の色彩のないわたしを隣に置いとけば、さらに美貌が際立って目立って合コンの中心的存在でモテモテって寸法ですよ。
わたしは、要は、瞳ちゃんを美味しくするためのダシとして呼ばれたわけです。
瞳ちゃん以外の人も同じでしょ。ま、始めっから2度くらいしか顔合わせたことない初対面ばっかで、今後も話の合いそうにないメスどもだったから友達になりたいとは思わなかった。というか奴等はわたしとなんて全然、男の人たちとしか話してないじゃん。その男の人たちもわたしとはあまり話さないし。ね。
だからです、テーブルに戻るのが嫌なんです。でも、でも椅子に置き忘れたルイヴィトンは捨て難いのです。

どーしよ、どーしよ。
そういう気持ちが、動機。
『魔女なんだからー、力を使っちゃえばいいじゃーん』
動機に裏打ちされた行動に移ります。人目がなくて影の濃い路地裏に場所を移して、えーとどうすればいいんだろう。
『水くせぇ、水くせぇよ望ちゃーん。夜の手を使いたいなら、すぐに、わたしを、呼び出してくれればいいのにー。ほっほっほっほほ。酔った勢いなのかしらー、あーんなに嫌ってたのに、すんなりとわたしたちの魔女を使うんだね。でもわたしうれしい。やっと望ちゃんの魔女が役に立っちゃうんだからー』
「念じる、ればいいのかな？」
『千里の道も一歩からー♪　どんどん望ちゃんの好きなように魔女を現実に放り出してー。そうすれば魔女は望ちゃんのことがもっともっと好きになるしー、望ちゃんだってわたしのことが、好きで好きで、大好きでしょうがなくなっちゃうよー』
「手の周りに闇を集束して、それが濃く濃くなるように」
『ちょっち時間が掛かるのは心配なくてー。何事も慣れですからね。何度もやればすんなり出来るようになるからねー。自分の欲求を堪えもせずにそのまま垂れ流そうとする自制心のなさ、素敵だなー』
「あんこくのてで、ルイヴィトンを掴む」
『ほっほっほー！　うまいうまい、とーってもおじょーず！　満点

あげちゃえる魔女っぷりだね！　さっすが望ちゃんは今までの売女どもとは違うなー気品すら感じるみたいなー。キャハッ、てゆーか嘘でーす。すっげー毒々しいよね。あれ、これ誉め言葉よ？』

「ルイヴィトンを……取った！　できた」

『ゲーッツ！　ルイヴィトンをゲットだぜー♪』

グラスの触れ合う音、男女の喧騒に満ちた雑談。店員の忙しい足音。居酒屋。

十数分前まで黒崎望が腰を据えていた椅子の裏側の影。そこから黒い腕がニョッキと生えて、飛び出してきた。

影でできた、正体のない腕は、椅子の裏側から表側へと移り、文字通りの手探りで椅子のクッションの上を探る。

ふと指先にぶつかった、背もたれに立てかかっていたハンドバッグ。それを5本の先細った指で鷲掴む。

喰らいついたウツボが巣に獲物を引きずり込むように、ズルズル、黒い腕はハンドバッグを椅子の裏側へ運んでゆく。

ハンドバッグが黒い腕と共に影に吸い込まれ、居酒屋の店内から消えた。

店中の人間は誰もそれに気が付くこともなく、談笑と酒とアルバイトに夢中だった。

路地裏というだけでは説明のつかない、夜中だとしてもありえない濃さの闇の塊が、黒崎望の手首から先を覆い隠していた。その、直径２０センチほどの球状の闇から引き抜かれ、比較にならないほど明るい路地裏の影に戻ってきた望の手には、外面にブランドロゴが印刷されたハンドバッグがしっかりと握られている。望の創り出した魔女の闇は、バッグを手に入れるという役目を終えると、周囲

の闇に溶け込むように消えていった。

『こんぐらっちゅれーしょん！　おめでとー、おめでとー、あけましておめでとー望ちゃん！　夜の魔女とゆー新年を迎えたあなたに呪いあれー！』

マ、ラ、ソ、ンなんて、何年振りの運動だろうか。

長い髪が着地に合わせて背中を叩く。首と胸には心臓の早鐘が着実に速度を増しながらリズムを打っている。両腕は無意識に高く高く大きな振り子となり、疾走の助力となる。スカートの奥に隠れた両足のアキレス腱が美しく伸縮し、身体を宙へとはぜらせる。前方から現れる電柱と、視界の端へ消えてゆく街灯の、滞らずに常に流れ変化してゆく視界。夜の空気は一呼吸ごとに肺の薄汚れた細胞を壊し、同時に真新しい細胞を生み出してくれるような。誰の声も町の雑踏も耳に届かない、風の歌だけが鼓膜に気持ちがいい。おしゃれなヒールの高い靴じゃなくて、ナイキのスニーカーを履いてきてよかった！

黒崎望は、星野の後を追って駆けている。望が路地裏でルイヴィトンに夢中になっている間に、星野の姿は周囲からすっかりと消えてしまっていた。望は最後に彼の背中が立ち去った方向に、一直線に走っている。望の走る延長に星野が居るかどうか、そんなこと知らない。もしかしたらどこかの角を曲がったのかもしれない。けれど望はまっすぐ走った。まっすぐ走りたかった。進む方向に星野が居るか居ないか分からないが。追いかければ追いつくものだと漠然と思っていた。実際、望は一人の男の黒い影を、視界の先に捉えた。それが星野の気だるそうな背中だとは、遠目にも判断できた。望は思った。星野の背中を見つけた瞬間、それからどうしようか考えていなかったことを思い出した。自分が彼に何をしたいのか、言いたいのか、全然考えていなかった。ただ単に彼の背中を羨望して追い

かけてきただけ。告白とかそんな覚悟も準備も全然。そんなつもりはハナからなかった。

（どうしよう！）

ああ、考えがまとまるまで、立ち止まるか？　けれど正直、それは勿体の無い気がした。望の疾駆する速度は彼女の精神を柔らかい恍惚へ持ち上げていた。立ち止まるなんてそんな無駄な事はしない。じゃあ、星野の横を突っ切ってこのまま走り続けるか？　それはあまりに間抜けだ。星野を追いかける為に走り出したのに、彼を無視して通り過ぎてしまってどうする。それじゃあ、どうすればいいの？　この力強い速度を保ったまま、これを後援にした今の状態を維持したまま、星野に、

『飛び蹴りをかましちゃいなよ、面白いよーきっと。あいつ、地面をゴロゴロ転がっていくよ。ケケッ』

星野に、飛び蹴りを喰らわす。星野を追い掛けた自分の速度と気持ちを靴の裏に集約し、それを一気に放出。打撃という最もシンプルな部類の攻撃で、星野の背中へ自分の思いをぶつける。望の繰り出した蹴りの衝撃に、きっと星野は前のめりに倒れ、もしかしたらアスファルトをゴロゴロと間抜けに転がるかもしれない。最悪、星野は頭をコンクリートに強打するかもしれない。翻るスカートの可憐な望が着地する目の前で、反対に星野は無様に地面を這いずるだろう。アスファルトに手を付き、震える上体を起こし、切れた額から流れ出る大量の血液で朱に染まるのは、疑問と敵意の入り混じる表情。夜の闇に儚げに煌く潤んだ星野の瞳は、街灯を背にして影に隠れた望の顔を見上げる。望はとびっきりの笑顔で星野の激昂を歓迎する。白々しく、ゆっくりと優しく手を差し伸べて、言う。

「大丈夫ですか？」

（面白いかも！）
星野との接触方法は、それしかない！
さらに加速する。息が弾み、膝がぎしぎしと悲鳴を上げ、ふくらはぎが張る、足首は炎を纏ったように熱い！　疾走することの快感へ、徐々に苦痛の味が食い込んでくる。しかしそれすらも新鮮に思える。本当に長い間、長距離走なんてしなかった。身体中６０兆の細胞が躍動することを思い出し、嬉々の絶叫を上げている。星野の背中が５メートル先に迫った。いける！　望は両足で地面を蹴り、高く、飛び上がる。街灯に型抜きされて壁に映し出された彼女の影が、ほぼライダーキックのそれを模した美しさで、前方を行く星野の影に突き刺さる！

「ッそ！？　んぎゃッ！」

着地を失敗した望は靴の裏ではなく、膝と両手を地に付けた。速度が収まらない。気持ちとは裏腹に、身体は前へ進みたがる。手と膝が滑り、小学生の体育の授業の前転みたいに、アスファルトをゴロゴロと転がった。３回転４回転して、腹這いの姿勢でやっと止まる。

「ぅはっ」

痛い。なにより初めにまず、それを思った。
痛い。手を見る。身体を支えて犠牲になった両掌は黒く汚れて擦り剥けて、広範囲に粒状の出血をしていた。針を突き刺されるピリピリした外皮の痛みと、打ち付けた肉と骨の潰れたような鈍い内部の痛みがコラボレートする。アスファルト上を滑走した膝頭はきっと真皮からすっかり削げてしまっているのではないか。
痛い。熱い。

「いたぃ……」

地に伏した望に影が落ちる。首を起こし、見上げたそれは星野だった。街灯を背にして影に隠れた星野の姿は、望の想像していた自分の姿。彼の両目だけがギョロギョロと、人外のものの光を放っている。それは一瞬で望に恐怖心を植え付け、開花させる。

「う」

「お前」

「ごごめんなさい」

望の口から速攻で謝罪が飛び出した。星野の目付きは変わらない。だが反して、言葉と声調は穏やかなそれだった。

「お前、あんな足音立ててちゃ、分かるぜ。俺じゃなくったってな」

星野は望の蹴りが背中に接触する直前、身体をひねり、腰をかがめて望の射線から逃れたのだ。標的を失った望の飛び蹴りは、覚悟の無いまま失速をして墜落してしまった。

星野が1歩、近づいてきた。望の身体がビクッと波打った。足を踏み出し、こちらにやってくる星野の動作に何の意を感じたわけでもない、逆に彼がアスファルトを転げた自分を心配している雰囲気は何となく掴めたが、それでも彼が近づいてくることに躊躇を感じた。殺意は感じないが、殺される気がした。いや、違う。これは星野に飛び蹴りを喰らわそうとした望自身の罪悪感の増長なのかもしれない。

「立てんのか？」

差し出された星野の黒い手を取ることにためらった。相変わらず痛みを引きずる両手でアスファルトを押し、足に力を入れると、途端に激痛が走る。その出所は擦り剥いた膝頭ではなく、足首だった。捻挫だと直感した。捻挫は安静を過ぎ、動作に移るとたちまち凶暴さを増し、足首を激烈に痛めつけてくる。最悪だ、どうやら両足を捻挫してしまっている！　四つ這いの姿勢から、立つことが出来ない。震える四肢と、突き出した尻。望の姿は生まれたての仔馬を模していた。人前で披露するには充分な屈辱に値する格好だった。星野の目の前でとんだ醜態を晒している恥辱に、身体中の血液が顔面に集まってくるのを、つまびらかに感じた。
恥ずかしい。最悪のレベルで恥ずかしい。

「なんだお前？」

「ああの、足、捻ったみたいなんです」

「は？　どっち？」

「り、両方」

「はっ？　バカじゃねーの？」

「そ、そんなこと言われても。実際そうですけど……」

「立てねーのかよ」

「はい」

そこまで聞くと、星野はへーえと呟いた。例のＨＯＰＥという煙草

を取り出して、火を点け悠長に吸い込み始めた。赤い火でやっと、目だけでなく星野の顔全体が見えて、望は安心した。それよりも、いつまでも生まれたての仔馬をしているわけにはいかない。ここはひとつ、恥を忍んで。

「あ、あの」

「あ？」

「あの、足捻って、立てそうにないんです」

「ああ。それで？」

「え？　あの、えーと。えーと。立ち上がるのに、手を貸してもらないかなぁと、思って」

「はっ？　テメー、人にモノ頼んだことねーのか？」

「え？　あります」

「そーじゃねーだろ、言い方。なあ、まず言うことがあんだろが」

「え、どういう……」

「『た』」

「た？」

「『たすけ』」

「え？　あ。ああー、あー」

「『たすけて』」

「おねがいします、助けてください」

「よし。助けてやる」

（……せ、性格悪ッ！）

睨みつける望の視線に気付いているのかいないのか、綽々と煙草を吸い終えた星野が望の前にしゃがみこんだ。

星野におぶってもらった。望は、少し恥ずかしい気もしたが、両足を捻挫してるから肩を貸してもらったところで碌に歩くこともままならないだろうし、俗に言うところのお姫様抱っことか、最悪に死にたくなるほど恥ずかしい方法でもないし、まぁ妥当なやり方だな、仕方ないなと思った。幸いに周囲には人の目も無いことだし。いいかな、と思った。ただ、星野の背中に身体が密着することを除けば。星野はかなり性格悪い奴だから、小さいとか皮肉を言われるかと思っていたが、彼はそんなこと言わなかった。代わりにこんなことを話した。

「なんか、お前どっかで見たことある気がするんだけど、前にどこかで会ったっけ？」

「はっ？　あの、さっき居酒屋で」

「それくらい憶えてるっつーの。もっと昔の気がするんだけどよー」

「えー。全然分かんない」

「俺も分かんねぇ」
「なにそれ……似た人じゃないの？」
「かもな。つーかなんでタメ口なってんだよテメェ」
「別に、ほ、星野、お前だってタメ口じゃないか！」
「降ろすぞコラ」
「あっ、あっ、うわっ！　危なッ！　ごめん、ごめんなさい！　タメ口やめますッ！」
「分かりゃいいんだ」
（性格悪ッ！）
星野は最低の男だ。と、望は思った。
なぜこんな男に一瞬でも気をやってしまったんだろう。
星野は、最低なだけじゃない。また落とされそうになるかもしれないと思って望が腕に力を込めただけで、
「苦しいんだよ、バカッ！」
と怒鳴って望をマジに振り落としたり、歩いている最中にずり落ちそうになった望に、
「バカ、しっかり掴まってろ！」
と矛盾に満ちた罵りを浴びせたりする、とんでもない自己中だっ

た。
一番頭に来たのは、動けない望を駐車場に放置したまま、ファミリーマートで小一時間近くも立ち読みしていたことだ。けれどそれは、食べたいと言ったアロエヨーグルトをおごってくれたので水に流してやった。
星野の背中は、彼が黙ってさえいれば、望にとってまずまずの心地よさだった。
いや、まずまずではない。正直に、とても心地がいい。父親の記憶とは違うが、類似した安心感がある。認めたくはなかったが。きっと魔女という共通の気配を持っている者同士だからだろうと理解した。そう、魔女の気質が望の精神に影響を与えているのだ。この感情は望自身が感じているのではなくて、望の中の魔女が勝手に感じているからだと結論する。そうだよ、絶対魔女のせいだ。決してわたしが星野を気に入っているわけじゃないんだよー！　と、強く自分に言い聞かせる。自己暗示を掛けようと試みる。

それは無駄な方法だった。言い争いもあったけれど、ちゃんと家まで送ってくれた星野と、望は携帯電話の番号を交換した。いや、交換ではない。望が彼に赤外線を送り終えたら、星野はそのまま踵を返してアパートの階段を下り始めたのだ。
え。と、呼び止めようとしたが、番号交換を言い出した望の言葉を聞いたそのとき、星野は興味のなさそうな顔と態度をしていたのを、思った。そういえば彼女がいるって聞いたっけ。だけど、もしかしたら。それで、まず望が自分から赤外線を送っ、た、ん、だけど……。な……。

電話は、不意にきた。
合コンから2週間を経過した望が、落胆に呻き、ベッドに倒れ伏して、枕に顔を突っ込んでいたところへ、着信した。

低く、相変わらず不機嫌を伴う彼の声が、なぜか耳に心地よかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0235n/

魔女の夜

2011年1月25日06時23分発行